

糸乗 貞喜

(よかネットNO.11 1994.9)

長崎のことを勉強する機会があり、そのなりたちから明治以降、あるいは敗戦後の復活を通して見ながら、つくづく九州全体の典型ではないかと考えた。長崎は 16世紀以来西欧近代文明の窓口であり、明治以降は軍事拠点を軍事産業として、戦後は重厚長大産業を通して日本経済復興の先導役として推移してきた。しかし現在では人口減少率の最も高い県となっており、重厚長大産業の時代からの転換に苦しんでいる。これを抜け出す方向は何なのかについて、少し考えてみたい。

2,000人から60,000人へ

長崎が開港された頃の人口は、約2,000人ぐらいだったとされている。これは当然で、開港前は単なる漁村だったと思われるので、町の人口はなかったのかもしれない。ポルトガル船が、はじめて長崎へ入港したのが1571年で、その8年後の約2,000人という人口は、貿易に対応して急ぎ集ま

ってきた人々だろう。

1600年頃の日本の総人口は1,500万人程度とみられ、それが2倍になるのに300年（幕末まで）かかっているのであるが、長崎は急速に人口を伸ばしている。35年後の1615年に約25,000人となり10倍以上の伸びである。

都市基盤整備に着手するのも早く、1667年には給水工事にとりかかっている。80町の市街が形成された段階で約4万人となっている。この80町は出島 - 崇福寺 - 諏訪神社 - 長崎駅あたりを結ぶ約100ヘクタール（1キロ四方）の地域である（図表1「江戸時代末期の長崎」参照）。

本当は10～20万の過密大都市だった？

学問的ではないとお叱りを受けるかもしれないが、一寸想像力を働かせてみたい。図表2は人口の動きにかかわるものを抜粋した年表であるが、人口と戸数の関係に不自然なところが多い。10,160戸で64,523人、12,203戸で31,893人、10,581戸で27,166人などと、戸当たり人口が5.7人から2.6人のバラツキがある。そのバラツキの原因は人口の方であって、戸数の方は大体安定している。

ここからは全くの想像なのだが、一般に戸口（戸数と人口）というが、これは普通人として届け出られたものではなかったかと思う。つまり、ここに出てくる人口には、雇用者や宗族外の婦女子、あるいは人夫など（特定の戸に属さないものなど）は入っていない場合もありうる。戸当たり人口が最も多い5.7人としても、あまりに少なすぎる。現代のような核家族であるはずもなく、一家の中に、貿易都市を構成していくための番頭、手代、丁稚など、商家のメンバーが必要であり、商家の場合は、一般的には20人以上ぐらいと見られる。また、“こぼれもの”で暮らしていた船荷役や、陸側の各種人夫も加えると、戸当たり10人 = 10万人でも少なく、20万人程度の大都市だったのではないかと想像する。



図表1 江戸時代末期の長崎(出典:日本地誌、長崎県編)

単位：人

	全国	長崎県	福岡県	熊本県	大分県	鹿児島県
全産業	485.5	383.3	457.0	406.3	422.7	393.5
①地域づくり先導型	103.2	82.7	96.6	84.8	89.6	80.7
②地域基幹型	233.3	157.6	200.8	172.6	179.3	166.5
③地域サポート型	149.0	143.0	159.5	149.0	153.8	146.3

資料：事業所統計調査

図表2 人口千人当たりの部門別産業従者数

人口密度を考えてみると、表にのっている6万人だとすれば600人/haであり、住宅過疎になる以前の日本の大都市の中心部では、1,000人/haでもめずらしくない数字である。郊外の住宅団地などは、一般に100人/haぐらいであるから、一応相当過密ではある。ところで2,000人/haとなるとどうかというと、上海の中心部の人口密度を尋ねたとき「2,000人/ha余」と聞いたことがあり、これも不思議ではないと思う。以上は私の推理物語である。

盈物(こぼれもの)がもたらしたもの

こぼれ物というのは、荷役の際にこぼれ落ちたもののことである。これを雇い人夫たちが拾い集めて売買して収入としたもので、一種の権利とみなされていた。砂糖など弁当入れに拾い集めれば、家族1日分の米と同じぐらいになったといわれている。

しかし、ここで私が言いたいのは、もっと広い意味の“こぼれもの”についてである。貿易に付随してこぼれたもので、最も日本に大きい影響を与えたのは西欧文明である。洋学の窓口になった長崎は、ポルトガル語、スペイン語、オランダ語のみでなく、英語や露語の中心にもなっている。語学以外にも天文・地理、物理・化学、医学はいうまでもないが、さらには本草学(薬用に重点を置いて、植物等を研究した中国古来の学問)の中心ともなり、それが蘭学と結びついて博物学となっていた。

ここまで書いてきて司馬遼太郎の「ポンペの神社」というエッセイを思い出した。ポンペはオランダの海軍軍医で、長崎で開講している。神社というのは、山口県三田尻の人がポンペ先生の人柄と学問を尊敬して、庭に一詞をたてて朝夕拝んだという話である(興味のある方は「この国の私たち2」を参照されたい)。

貿易というものは、大変な“こぼれもの”をも

1579	約 2,000人	
1590	約 5,000	
1611	約15,000	
1615	約25,000	
1641		・長崎の市街は内町25町、外町49町(計74町)
1659	約40,700	
1667		・市内の給水工事着工(1673年完成)
1672	40,205	・市街77町(丸山、寄合、出島合わせて80町)
1681	52,702	・市街80町、戸数10,160、寺40、社10、造酒家160戸、丸山の遊女屋74軒(遊女数776人)
1696	64,523	・11,257戸
1708		・地役人1,702人
1771		・戸数10,143
1790	30,893	・戸数12,203
1833	40,019	・市街地256,064坪(3.3㎡/坪とすると85.4ha、3.8㎡/坪とすると97.3ha)、この頃の長崎は80町だったので、おおよそ1町=1haとみて良い
1838	27,166	・地役人など2,069人 ・市街戸数10,581

図表3 長崎の人口の推移
数値は、長崎文献社の「長崎事典」や日本地誌などを参照しながらまとめた。

たらずのものである。これ以外にも、長崎街道沿いの菓子産業も、長崎ルートがこぼしたものである。つまり広く文化にも及んでいる。

知的装備都市から重厚長大都市へ

明治以降の長崎は、それまでの日本を先導する役割から後押しする役割に転換していった。それが軍港化、軍需産業基地化であった。つまり知的部門は中央にとられて、ハード部門として生きることになってしまった。しかし表面的には、江戸時代より好景気となり、人口も再び急増することとなった。

このことは、敗戦後も続いている。一時的に低下した景気も“造船ブーム”で活況を呈し、大幅に人口が増えた。

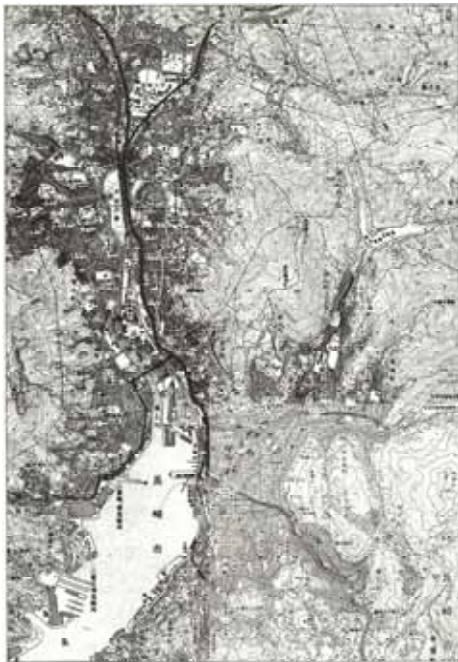
しかし現在は、日本全体の産業構造も含めて、重厚長大からの脱皮が急がれており、ソフト化・サービス化へ進んでいる。長崎はハード都市としての景気が良かったために、それへの転換がおくれているように見える。それを示しているのが図表3である。これは事業所統計を組みかえたもの



出典：日本図誌体系
 図表4 - 1 長崎の変遷(明治34年)
 出島周辺にまちができていた



出典：日本図誌体系
 図表4 - 2 長崎の変遷(大正13年)
 浦上に鉄道が入った



出典：日本図誌体系
 図表4 - 3 長崎の変遷(昭和45年)
 出島から浦上にまちが広がった

であるので、事業所に入らない農林漁業は含まれていないが、それにしても長崎県の知的部門を含む地域づくり先導型産業の従業者は少ない。また重厚長大型を含む地域基幹型分野でも全国平均より大幅に少なくなっている。

九州全体が、明治以前は日本の知的先進地であ

ったが、明治維新以後は重厚長大にシフトし、戦後も同じ道を歩んだ。表でわかるように、九州全県の先導部門が弱いということになっている。

長崎・九州の新しいみちは？

もう少し長崎の歩みを、地図の上で辿ってみる。図表4に3枚の地図を引用するが、図表4 - 1 (M34年)は江戸時代末期の長崎と大差はない。長崎奉行所(現県庁)や出島や唐人屋敷などを核にしたソフト機能中心の形を残している。それに加わったのが浦上まで来た鉄道と対岸の三菱造船所である。大正になると(図表4 - 2、T13年)、鉄道は現長崎駅まで伸び、三菱も拡大し、さらに紡績工場なども立地しはじめ、重厚長大へ向って変化しつつあることがわかる。図表4 - 3は重厚長大最盛期(S45年)の地図であるが、江戸時代の長崎は一部を形成するにすぎなくなっている。もちろんこのような人口増加が、最大の好況をもたらしたことはすでに述べた通りである。そして現在はその転換が急がれている。

新しい方向を考えるためのヒントとして長崎の観光産業がある。長崎市観光客の年間消費額は約700億円とされている(市観光統計)。一方、製造業の付加価値額は約1,000億円である。観光などというものが地域産業となったのは高度成長期以降のことであり、たかだか30年程度の歴史で

あるにしては、100余年の製造業と匹敵するとは立派なものである（消費額と付加価値を同一視しているわけではないことを少し説明する。観光業は付加価値率50%以上で、ほとんど全部地域内波及し、域内生産誘発効果も2.0ぐらいになるものとすれば、付加価値も700億円ぐらいになるとみられる）。

この観光収入は、文化・学術先端地域であった頃の遺産がもたらしたものであり、観光客は古い坂の街をせっせとあるいてくれている。

新しい方向は言うまでもなく、ソフト化・サービス化である。しかし江戸時代の長崎が受け持ったような条件はすでにないのであるから、日本の先端学術地域化ということは無理なように思う。不思議なことに、ソフト化・サービス化路線の都市であった頃は、長崎は坂を生かした街であった。ハード路線の頃は平地を求めてどんどん周辺に広がっていった。新しい時代のソフト化・サービス化も坂を生かす街づくりのような気がする。坂の街に老人も住みやすいように、市道・県道として、道路という考え方で小型斜行電車を縦横にめぐらす。観光客も喜ぶし、おそらく道路を建設するより安く上がるのではないかと思う。

長崎は高齢者率が高い。高齢福祉産業（旅行、遊び、文化などのソフト産業も福祉機器づくりなどのハード産業も含めて）に対する実験地にもって来いの土地柄である。

九州は気候温暖であり、日本の他地域と比べると福祉産業に有効な土地柄である。そして農漁業が福祉や観光などの核になる。重厚長大から幅広いソフト路線への転換が望まれる。

もうひとつ加えると、長崎や九州が、あるいは東京を除く日本のすべてが、量的拡大＝首都圏と同じ拡大路線を指向しているかぎり東京への一局集中は止まらない。首都圏集中で対応しきれないもの、地域の独自性を生かしたものを長崎や九州、

あるいは日本の地方が指向すれば、東京にとっても好ましい日本ができる。そしてそれが、今後の日本の歩むべき方向であり、地元にとってもバランスをとりもどすための早道である。